大腸がん検診（職域）

動　　向

食生活の欧米化などにより大腸がんは，男女ともに毎年，増加傾向にある。

平成15年度の職域における受診者数は，52,078名となり，昨年度より1,407名減少した。

当協会の大腸がん検診は，一次スクリーニングに自覚症状を主とする問診と免疫学的便潜血反応検査２回法を実施している。その精密検査は，同一日に内視鏡検査と大腸X線撮影を実施しており，診断精度の高い検診システムとなっている。

大腸精密検査の結果は**表４**に示すとおり，大腸がん15名と大腸ポリープ233名が発見され，高い病変発見率を示している。その反面，精密検査受診率は26.1%と極めて低く，この点が今後の大きな課題である。

大腸がんは，早期に発見できれば治癒する，治りやすいがんであるため，早期発見には定期的に検診を受けることが大切である。また，生活習慣においては，バランスのとれた食事を摂ることが，大腸がんの予防策となる。

方　　法

大腸がん検診の実施方法は従来と同様に１次は便検査によるスクリーニング，2次は大腸内視鏡検査及び大腸造影検査で対応している。大腸内視鏡検査と大腸造影検査の併用方法は同一時期に大腸の内部から，及び外からの見る造影検査を同日に実施するため，受診者の方々には１日の検査となるが苦痛を伴う前処置を１回で済ませるなどそのメリットは多きいと考えている。検査の特徴は内視鏡検査・大腸造影検査のメリットを最大限に発揮できるようプログラムされ，前処置に腸管洗浄液を用い，その効果として内視鏡のスムーズな挿入と苦痛の減少により短時間検査が可能になった。また，同日に行う造影検査も自動注腸装置とダブル・バルーンカテーテルの採用により造影剤の漏れ防止と検査後の造影剤や空気の排出も行えるので，検査後の苦痛も少ないなどメリットがあり，検査後直ちに帰宅することが可能である。

結　　果

受診者数はほぼ例年どおり，受診者数は52078人，要精密検査は便潜血陽性者3474人6.7%，問診票からは271人，0.5%，自機関で精密検査を行うAグループは27665人要精密検査者は1866人6.7%で便潜血反応検査陽性者は1701人6.1%問診票からは0.6%である。このうち精密検査を受診したものは487人26.1%と４分の１である。ここから発見された大腸がんは要精密検査受診者に対して15名3.08%と高率を示す。大腸ポリープは233人47.8%で２人に１人の割合でポリープが発見されている。便潜血２回陽性者からは６名の癌が発見されている。これは発見率40%で２回便潜血陽性者は必ず精密検査を受診して欲しい。また，自覚症状ありのグループからは１人も癌が発見されていない。これは，自覚症状がでたら治療対象群で検診よりも病院受診が優先しているためであると考える。検診は無自覚症群が対象であるため，正常に機能が稼動していると考える。

関係の集計表は70頁に掲載